

まえがき

大手前大学交流文化研究所は、1971年福井秀加大手前学園第2代理事長が中心となり大手前大学に設立されたアングロノルマン研究所を発展させて、2003年に発足した。アングロノルマン研究所は、紀元11世紀頃中世イングランドで使用されたアングロノルマン語と、その文化、歴史を研究する日本における最初の機関として、福井秀加所長、大高順雄教授の尽力によって多くの資料、文献を集め、中でも『トゥルナン城』*Chateau Tournant* (1470年頃の写本)、『大都トロワ物語』*Hisitoire Troyes la Grant* (1364年以降の写本) など貴重な資料を蔵し、ケンブリッジ・トリニティカレッジ蔵 *Apocalypse Anglo-Normande* : (Cambridge Trinity College MS. R. 16. 2.) をはじめとする貴重書の復刻や目録を刊行するなど、アングロノルマン文化の研究、普及に寄与してきた。

交流文化研究所はこうした業績を受けてさらに研究範囲を広げ、1996年に設置された大学院比較文化研究科とも連携しながら、東西の文化の交流をさまざまな視点から考究するという目的に沿い、原則毎年1回、文化交流をテーマとしたシンポジウムを開催、その成果を思文閣出版の協力を得て「大手前大学比較文化研究叢書」として刊行し、大方の好評を博してきた。叢書は2002年の松村昌家編『谷崎潤一郎と世紀末』を初号として、現在までに11号を刊行、本書は第12号となる。

大手前大学は2012年9月にパリ国立高等美術学校(ENSBA)と提携協定を結び、交換留学生制度が発足して、翌2013年9月に第一回留学生を大手前から派遣、また2014年4月にパリからの留学生を迎えることとなった。パリ国立高等美術学校には明治中期の駐日フランス大使館員で日本通のエマニュ

エル・トロンコワが蒐集した江戸時代の肉筆浮世絵、和本のコレクションがある。その全貌が日仏両国においてあまり知られていないことから、それを所蔵するパリ国立高等美術学校と提携協定を結んだ記念として、2013年11月本学教員のほか内外の専門家を招き、コレクションの紹介を中心として「日仏文学・美術の交流」と題するシンポジウムを、笹川日仏財団の助成も受けて開催した。その成果は2014年3月刊の叢書第10巻に詳しい。

幸いシンポジウムおよび叢書第10号は好評を博し、昨年度はそれを発展させる形で、日本、フランスの両国において文化的特徴となっているマンガ・バンドデシネ文化について、2014年11月22日（土）および23日（日）の2日間にわたって、両国のマンガ作家、翻訳家、研究者がその特質と交流を議論する場を持った。その成果は叢書の11号として刊行されたが、前号と同様あるいはそれ以上に多くの読者を持ったと聞く。

こうしてパリ国立高等美術学校との提携を記念し、同時に大手前学園創立70周年、大手前大学創立50周年を祝う企画として、大手前大学のメディア・芸術学部を中心として開催してきたシンポジウムの、いわば総仕上げの形で、2015年度はその後さらに調査を進めてきたトロンコワ・コレクションとその周辺をテーマに、11月21日（土）、22日（日）の両日、再び日仏の専門家を招いてコレクションの真価を明らかにする企画を立てた。

フランスからは第一回で参加された3名に加え、今回新たに2名、日本から5名の研究者に参加いただき、さらに本学のメディア・芸術科の教員4名も自身の作品の展示とともに、現代における芸術創作の意義について語っていただくことにした。

今回特筆すべきは、トロンコワ・コレクションのうち3点を、交流校である ENSBA から借り受け、学芸員エマニュエル・シュヴァルツ Emmanuel Schwartz 氏のご好意で、パリから氏が遠路自ら運んでくださったそれらの貴重な作品を展示できたことだ。1904年に帰国するトロンコワとともにフランスに渡った日本の肉筆絵画が100年ぶりに里帰りしたわけで、本学美術教員の作品とともに、シンポジウム開催に合わせて本学アートセンターで展

示を行った。さらに林進大手前大学美術史講師の嵯峨本コレクションの一部を会場で披露してくださったことも、シンポジウムの興趣をいっそう盛り上げることになった。

叢書第11号の「まえがき」に書いたように、日仏マンガの交流に関するシンポジウムに参加されたカトリーヌ・ムリス氏が、昨年1月6日の『シャルリ・エブド』誌編集部を襲ったテロに、あやうく巻き込まれそうになったことは記憶に新しいが、今回のシンポジウム開催のちょうど一週間前に、パリの3か所でテロによる爆破事件が起こり、パリからの参加者を迎える準備をしていた我々は、フランスからの参加者無しの開催さえ覚悟したが、テロ発生3日後に、依頼したコレクションのうちの3点を抱えて、シュヴァルツ氏がロール・アベルシル氏と同じ飛行機で関西空港に降り立ち、ついでレジス・ミシェル、マリ＝カトリーヌ・サユットの両氏が開催前日に到着した。彼らの篤い友情に心から感謝したのは言うまでもない。

シンポジウムの進行は、ほぼ本書の配列に同じく、その内容についてはマリ＝カトリーヌ・サユット氏の文章があるのでそれに譲るが、当日司会をつとめてくださった本学の小林宣之、石毛弓両教授、また日仏両語のテキストを見事に翻訳してくださった田辺めぐみ帝塚山学院大学講師、中村翠京都市立芸術大学講師、さらに仏語訳テキストを綿密に校閲して下さった大阪大学講師エリック・アヴォカ氏に厚く感謝する。それにしても一人で日仏両語を同時に操る神業を披露されたクリストフ・マルケ、稲賀繁美の両氏には感嘆のほかない。

今回のシンポジウム開催にあたっては福井要大手前学園理事長はじめ、学園、大学の周年事業関係各位のご好意を得、コレクションの借用にあたっては、ニコラ・ブリオー Nicolas Bourriaud 前パリ国立高等美術学校学長、エマニュエル・シュヴァルツ学芸員にご尽をいただいた。改めて厚くお礼申し上げます。また初回の日仏シンポジウム以来、多大のご援助をいただいている笹川日仏財団、とりわけ伊藤朋子事務局次長にはこの度もお世話になり感謝の言葉を知らない。

コレクションの全容を窺うに足るパンフレットを作成して、当日配布してくださった本学学芸員戸村知子氏、ポスター、チラシの意匠に力を尽くし、さらに本書のカバーのデザインを担当していただいた大手前大学メディア・芸術学部アシスタントの池淵遼介氏、シンポジウム開催から叢書刊行までの多端な事務作業をこなしてくださった丸山洋子さん、本叢書の編集に携わって、図版の検討、配置などご苦心くださった思文閣出版の三浦泰保氏をはじめ関係する方々にも厚くお礼申し上げます。

編者を代表して

大手前大学 交流文化研究所 所長
柏木 隆 雄



シンポジウム後のスナップ

(2015. 11. 22. 於大手前大学セル・フォーラム)

前列左より ロール・アベルシル、いまふくふみよ、エマニエル・
シュバルツ、柏木隆雄、柏木加代子、伊藤朋子、マリ＝カ
トリーヌ・サユット、山田信義

後列左より 石毛弓、中村翠、久木一直、稲賀繁美、右端田辺めぐみ

I トロンコワ・コレクションをめぐって

装飾芸術連合図書館の日本コレクションに見る
トロンコワ＝ルボーディ寄贈品について

ロール・アベルシル(田辺めぐみ訳) 5

トロンコワ旧蔵の山東京伝『近世奇跡考』の草稿本
——江戸時代の文化、風俗を考証した戯作者の随筆とフランス——

クリストフ・マルケ 21

宗達のグラフィック・デザインにおける「無常」 林 進 45

立ち美人の居るところ 松尾芳樹 67

トロンコワ・コレクションの芝居絵を読む 柏木加代子 80

II トロンコワ・コレクションの周辺

フェリシアン・シャレー『図版入り日本』と
エマニュエル・トロンコワ

柏木隆雄 101

ジャポニスムと琳派：装飾再考「うつり」と「うつし」の観点から
——ルイ・ゴンス、ロジェ・マルクス、エミール・ガレ、クロード・モネの周辺——

稲賀繁美 123

日本のトンボとヨーロッパのトンボ
——美術的・文学的研究——

エマニュエル・シュヴァルツ(小林宣之訳) 154

肌に描く絵
——現代シネマに見る芸術家の神話——

レジス・ミシェル(田辺めぐみ訳) 173

Ⅲ 日本の近代美術と現代アート

創作について 井澤幸三 194

私の作品について いまふくふみよ 196

私の立ち位置 久木一直 198

絵画
——創り続けて—— 山田信義 200

シンポジウムを総括して
マリ＝カトリーヌ・サユット(柏木隆雄訳) 203

トロンコワ旧蔵の山東京伝『近世奇跡考』の草稿本 ——江戸時代の文化、風俗を考証した戯作者の随筆とフランス——

クリストフ・マルケ

フランスにおける日本学の先駆者の一人であるエマニュエル・トロンコワ (Emmanuel Tronquois, 1855–1918) は、日清戦争勃発直前の明治27年4月に来日したのち、通算で13年間にわたり日本に滞在し、多くの江戸時代の絵入り版本や絵画などを研究資料として蒐集した¹⁾。版本の数は約3400冊で、19世紀にフランス人によって集められた最大の和古書コレクションである。現在、2218冊が四つのパリの図書館に分蔵されているが、残りの1179冊は1921年に遺族による売り立てによって散逸してしまっている。筆者は15年ほど前から、それまでほとんど忘れられていたこのコレクションに注目し調査を重ね、目録を作成して研究をしてきた。この和本コレクションによってトロンコワが江戸時代の絵入り文学、出版文化史を研究したことについて、第一回のトロンコワ・コレクションのシンポジウムの報告書で述べた²⁾。この和本コレクションはほとんど江戸時代（一部は明治時代）の版本で構成されているが、その中にある一点のとりわけ重要な手書きの草稿本を、ここで紹介させていただきたい。

第1節 『近世奇跡考』の草稿本の発見

2005年4月に実践女子大学教授の佐藤悟氏とパリで和本の調査をしていたところ、その最終日にルーブル美術館の一角にある装飾美術館付属図書室の書庫で、幸運にも山東京伝 (1761–1816) の代表的な随筆である『近世奇跡考』の自筆草稿本を発見することができた³⁾。調べたところ、同図書室の台帳の1912年3月12日の欄（登録番号19665）に「京伝 日本の草稿 十八世紀



図1 『近世奇跡考』草稿本の表紙
パリ装飾美術館付属図書室蔵

つまり『近世奇跡考』の草稿本は京伝の没後約90年を経てフランスに渡ったことになる(図1)。トロンコワは蔵書印を捺してはいなかったものの、草稿本の表紙の右上に自筆で自分のコレクションの整理番号(1600/1)を記している。

この草稿本は装飾美術館に寄贈された後、長い間書庫に眠ったままその存在を忘れられていた。京伝の草双紙の自筆草稿本は日本で数点現存しているが、考証随筆に関してはパリで発見した『近世奇跡考』が唯一のものである。

草稿本の表紙には「作者醒々老人 近世奇跡考 卷之一 総紙数八十九丁 全部五冊 墨附廿四丁」と記されているが、実際にあるのは合冊された巻之一から巻之三のみである。それぞれの表紙の綴目に「江戸三組／年番／書物問屋」という行事改印(墨印、四辺単郭、縦6.2cm×横4.9cm)が押されていることがまず目に入り、改(検閲)を通ったことが分かる。丁数は墨附二十五丁、十五丁、十三丁あり、項目はそれぞれ18条、13条、10条ある。この草稿本には京伝自筆の切り貼り、抹消や訂正が多くあり、文化元年12月(1805年1月)に出版された『近世奇跡考』(大坂 河内屋太助、江戸 大和田安兵衛)の版本には見られない逸文もいくつか見いだすことができる(図2)。これは随筆の執筆過程や検閲問題を理解するために大変貴重なことである。書名についても、最初は『好古雑記』とされていたが、次に『好古瑣

末 八つ折り判 三冊 ルボーディ寄贈」とフランス語で書いてあることから、当初より京伝の草稿本として認識されていたことを確認できた。寄贈者のロベール・ルボーディ(Robert Lebaudy)は実業家で、トロンコワによって明治30年代に日本で蒐集された江戸時代の絵入り本や浮世絵・絵画コレクションを一括購入し、1907年に国に寄

言』、そして『好古雑話』、『好古雑書』となり、最終的に『近世奇跡考』と決定するまでには幾度も書名を変更していたことが判明した。また、この草稿本と版本の比較によって、京伝は筆耕に頼まずに、版下を自分で書いていたことが分かった。京伝の読本『^{うどんげものがたり}優曇華物語』の一部も同様である。⁶⁾



図2 『近世奇跡考』草稿本、巻之一
パリ装飾美術館付属図書室蔵

また、挿絵を依頼した南画家の喜^き多武清^{たぶせい}（1776-1857）とのコラボレーションの一端を窺えるのも、この草稿本の重要なところである。表1の一覧の通り、巻一から巻三までは挿絵が27図（巻四と巻五を合わせると44図）ある。その挿絵は大きく分けて、古い文献を透き写した「古図」（「古画」とも呼ばれる）と「新画」の二種類ある。

「古図」（14点）については、京伝は凡例に「古図はすべて予が自画なり」と書いている通り、自分で写したものである。それらの挿絵は京伝と武清の蔵本の他に、友人の木村太朝や京伝が交流した戯作者の歙形蕙斎、烏亭焉馬（談洲楼）、京都の鑑定家・河津山白、国学者の細井貞雄（詞花堂）などから⁷⁾借りた、17世紀末から18世紀初めの稀覯本の挿絵から転載したものである。⁸⁾

「新画」（6点）、つまり写しではなく新たに、創作した挿図に関しては、京伝自身がたまかな下絵を描いたうえで、親しかった絵師の喜多武清に細かく注文をしている。たとえば「山中平九郎 扮^{おんりやうにふんするづ}怨霊^{かさねおんりやうのづ}図」、「累女怨霊図」（図3・4）、「熊野比丘尼^{くまのびくにえときのづ}絵説図」、「其角於^{きかくうしじま}牛島^{においてあまごひをみるづ}観^{きかん}雨乞^{あまごひをみるづ}図」においては、大体の構図を示して、注意書きを施すだけであった。さらに、巻一「天和年間^{てんわねんかん}東叡山^{とうえいざん}花見図」（版本では「天和年上野花見図」と修正）（図5・6）と巻二「紀文追讎^{きふんのづ}之図」の二つの挿図については、京伝が指示を詳しく記すのみであり、絵師の創作に完全に委ねているのである。ちなみに、当時29歳であった喜多武清は通俗文学の挿絵を描く浮世絵師ではなく、谷文晁の弟子であり、



図3 『近世奇跡考』草稿本「累女怨霊図」
パリ装飾美術館付属図書室蔵



図4 『近世奇跡考』版本「累女怨霊図」
国立国会図書館蔵



図5 『近世奇跡考』草稿本「天和年間
東叡山花見図」
パリ装飾美術館付属図書室蔵



図6 『近世奇跡考』版本「天和年上野
花見図」
国立国会図書館蔵

『集古十種』（寛政12年、1800年頃刊行）の編纂に携わった南画家として知られている。その他に、京伝の『優曇華物語』（文化元年12月、1805年1月）と考証随筆『骨董集』（文化11-12年、1814-15年）の挿絵も担当したが、基本的には絵師として活躍し、また古画の鑑定も行なうなどして、多くの粉本を残した。

そして、「古画」でもなく「新画」でもない挿図が7点ある。それは現地調査などに基づいて描かれた現物の模写である。たとえば縫箔と摺箔の小袖

シンポジウムを総括して

今回で二度目となる大手前大学交流文化研究所のトロンコワ・コレクションをテーマとするシンポジウムは、エマニュエル・トロンコワを導きの糸として、19世紀以降の日本の芸術と、フランスにおけるその受容に関して、熱のこもった議論を展開した。

トロンコワが日本における最初の滞在からフランスに帰国する1904年の時点で、なるほど何人かの芸術家や蒐集家などは日本の芸術を発見し、それらに驚嘆の目を瞠ったものの、アジア文明研究の開拓者であるこの碩学が情熱を込めて蒐集、自国にもたらした書籍や肉筆絵画、版画のコレクションの重要性を、フランスはおそらくはまだ理解するまでにはいたっていなかった。このコレクションは1907年に、芸術愛好家で、その保護者でもあったロベール・ルボディによって買い取られて、フランス国家に寄贈されたが、それはさらに以下の5つの機関に分配されることになる。すなわちルーヴル美術館（寄贈されたものは後にギメ美術館に収められる）、ギメ美術館、国立図書館（BN）、アール・デコラティブ中央連合、そしてパリ国立高等美術学校である。

本論文集はそのシンポジウムでの諸発表を集めたものだが、その内容の豊かさや多様性は、批評的思索を刺激して止まない。

ロール・アベルシル氏は、パリ、アール・デコラティブ図書館の収蔵物に関して、トロンコワ・コレクションの版画や肉筆絵画の美的、図像的意義を明らかにして、如何にそれらがフランスの芸術家や工人たちの発想の淵源として用いられたかを詳述する。

このトロンコワがいかなる人物であったか、彼の本領が正当な位置に定められることになったかについては、クリストフ・マルケ氏とその学問的業績があつてこそのことである。江戸時代の版本に関する知識に大きな役割を果たしたこの愛書家は、フランス国立図書館の版画部門室にあるトロンコワ・コレクション収蔵本の中にある一冊の稀覯書から説き始めて、その本が山東京伝の自筆で、『近世奇跡考』の草稿であることを明らかにした。

もう一つ作品、トロンコワ・コレクション中、これまで誰の手になるのかわからなかったパリ国立高等美術学校に蔵される『草鞋の屏風』についての柏木加代子氏の発表は、その研究を深く掘り下げ、その屏風が絵師奥村政信の作品であることを突き止め、その図像が18世紀芝居絵として解釈され得ることを論じて、探求の真のあり方を示した。

日本文明に関する書物がフランスに出現するについてトロンコワの果たした役割は、1905年刊の『図版入り日本』の著者フェリシアン・シャレーへの協力にも現れている。柏木隆雄氏はその書籍中の文学と日本美術に充てられた2つの章をトロンコワが主として執筆した可能性を論じている。

次にトロンコワ・コレクション周縁に位置づけられる諸問題についての発表について紹介したい。

林進氏は俵屋宗達におけるグラフィック・デザインの「無常」をテーマとした論考を更に発展させ、もし宗達の芸術が、彼と同時代の西洋に知られていたなら、おそらく西洋美術に重要な影響を与えたに違いないとの確信を披露した。

松尾芳樹氏は日本の各美術館に所蔵される「立ち美人図」について、きわめて詩的な形でひとわたりその歴史と経緯を説明し、それが個人の表象から、

近世日本の文化的コードのプリズムを通すことによって、一般的なテーマへと移るきっかけとなったことを明らかにした。

エマニュエル・シュヴァルツ氏は、蜻蛉のごく小さい種類である「ドモワゼル」をテーマとして、ヨーロッパの図像にもないことはないこの昆虫が、日本の文明と比較すると、如何に二次的な役割しか果たして来なかったかを示す。象徴主義とジャポニズムが興るとともに、ジュディット・ゴーティエの『蜻蛉詩集』からマルセル・ブルーストの作品まで、蜻蛉は装飾芸術やフランス文学を席卷することになった。

テオドル・デュレの専門家である稲賀繁美氏は、ヨーロッパにおける琳派の提唱者としてのこの批評家を論じ、またこの17世紀日本の装飾派と印象主義の画家たちとの親近性を説いた後、クロード・モネの一連の水蓮図への尾形光琳の影響の可能性に及んだ。

最後にレジス・ミシェル氏が、描画を主題とした5つの映画作品における、芸術と死の関係を明らかにした。溝口健二の『歌麿をめぐる5人の女』の女性の肌に描くきわめて象徴的なモチーフから始めて、イム・グオンテク、ピアラ、ステリング、ワトキンスに見られる一連の神話的葬送の形を論じた。

シンポジウムは大手前大学で諸芸術を講じる、久木一直、いまふくふみよ、井澤幸三、山田信義の各教授による自己の芸術についての紹介で幕を閉じた。教授たちは才気溢れる形で、また確固とした信念のもとに成った自身の芸術作品を披露し、それぞれの芸術がどのようなインスピレーションのもとに作られたかを語った。

以上述べた今回のシンポジウムの各発表を一冊にまとめた本書は、日本の芸術とフランスでの受容に関する諸研究の科学的、批評的価値を示すもので

ある。シンポジウムは各発表の密度の高さ、多数の聴衆の参加によってその知性のありようを印象づけた。そしてまた同時にこうした研究とその成果について、未来への大きな展望をも開くことになった。

大手前大学でこのように日仏の文化交流の新しい場を作り出したことに対して、柏木隆雄、柏木加代子両教授の労をねぎらい、また感謝したい。両氏のフランスの文学、言語、芸術についての完璧な知識、対話の妙、開かれた精神が、二人を地球の両極にある二つの国、フランスと日本の文化の比類無き「大使」としている。両氏に、讃歎の辞を捧げるとともに、私たちの30年の交流に育まれた友情に感謝したい。

大手前大学交流文化研究所によるエマニュエル・トロンコワにかんする調査・研究はこのシンポジウムの成果公刊によって一応閉じられるが、この本と同様、同じ時期に刊行が予定されているトロンコワ・コレクションの絵画部門の図版カタログが、柏木加代子氏を中心となって作成され、20世紀初頭にフランスで四散して以来、始めて一冊の書籍の形で集められることになることを付け加えたい。

ルーヴル美術館名誉首席学芸員
マリ＝カトリーヌ・サユット

(柏木隆雄訳)

編者紹介

石 毛 弓 (いしげ・ゆみ)

1970年京都府生。龍谷大学文学部哲学科哲学専攻修士課程修了。イギリスのダーラム大学人文学部哲学科博士課程修了。大手前大学現代社会学部准教授。専門は西洋哲学。単著に『マンガがひもとく未来と環境』（清水弘文堂，2011年），共著に『大学における学習支援への挑戦——リメディアル教育の現状と課題——』（ナカニシヤ出版，2012年）など。

柏 木 隆 雄 (かしわぎ・たかお)

1944年生。大阪大学文学研究科博士課程修了。パリ第Ⅶ大学第Ⅲ期博士。大手前大学大学院研究科長。

Balzac romancier du regard, Nizet, 2002. 『交差するまなざし——日本近代文学とフランス』（朝日出版社，2008年），翻訳バルザック『ソーの舞踏会』，『暗黒事件』（ちくま文庫，2015）。

小 林 宣 之 (こばやし・のぶゆき)

1953年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。大手前大学メディア・芸術学部教授。著書に、『エクリチュールの冒険——新編・フランス文学史——』（共著，大阪大学出版会，2003年），訳書に、『ネルヴァル全集』第2巻，第4巻，第6巻（共訳，筑摩書房，1997年，1999年，2002年），エリック＝エマニュエル・シュミット『そこにモーツァルトがいたから』（キネマ旬報社，2006年）など。

執筆者紹介（掲載順）

Laure HABERSCHILL（ロール・アベルシル）

1970年生。パリ第12大学歴史学修士。装飾芸術連合図書館司書。

« Quand le Japon s'invitait à dîner : les Amis de l'art japonais », in *Le Cabinet des merveilles de monsieur Maciet : écriture et imprimerie* (Fédération française pour la coopération des bibliothèques, des métiers du livre et de la documentation, 2004), « Livres, gravures, photographies » (Béatrice Krikorian との共著), in *De la Chine aux Arts décoratifs : l'art chinois dans les collections du musée des Arts décoratifs* (Les Arts décoratifs, 2014), *La Chine des ornemanistes : gravures de chinoiseries à la bibliothèque des Arts décoratifs* (Les Arts décoratifs, 2014).

Christophe MARQUET（クリストフ・マルケ）

1965年生。フランス国立東洋言語文化大学（INALCO）教授。現在，日仏会館（東京・恵比寿）フランス日本研究センター所長を兼任。研究分野は日本近世・近代美術史と出版文化史。

編著に『絵を読む、文字を見る——日本文学とその媒体——』（『アジア遊学』2008年），『日本の文字文化を探る——日仏の視点から——』（勉誠出版，2010年），『テキストとイメージを編む——出版文化の日仏交流——』（勉誠出版，2015年）等。

パリ国立図書館を初めフランス各地の図書館や美術館で和本コレクションを調査し、歌麿『画本虫撰』、『絵本青楼 年中行事』、鉢形蕙斎『人物略画式』、中村芳中『光琳画譜』、北斎『諸職絵本 新鄙形』、河鍋曉斎『曉斎百鬼画談』など、江戸・明治期の絵本を数多くフランス語に翻訳して復刻出版。2015年に欧米で初めての大津絵についての著書『ÖTSU-E: imagerie populaire du Japon』をフランスで出版(2016年に角川ソフィア文庫で邦訳出版予定)。

林 進 (はやし・すすむ)

1945年生。神戸大学大学院文学研究科修士課程修了(芸術史)、博士(文学)、大手前大学非常勤講師。

『雪村』(共著、講談社、1995年)、『日本近世絵画の図像学——趣向と深意——』(八木書店、2000年)、『宗達伊勢物語図色紙』(共著、思文閣出版、2013年)、『宗達絵画の解釈学——「風神雷神図屏風」の雷神はなぜ白いのか——』(敬文舎、2016年)。

松尾 芳樹 (まつお・よしき)

1959年生。京都市立芸術大学大学院美術研究科(美術)。京都市立芸術大学芸術資料館学芸員。

『仏教図像聚成——六角堂能満院仏画粉本』(法藏館、2004年)、「中世土佐家の所領」(『京都市立芸術大学芸術資料館年報』22号、2013年)、「京都府画学校出仕について」(『京都市立芸術大学芸術資料館年報』18号、2009年)。

柏木加代子 (かしわぎ・かよこ)

1947年生。京都市立芸術大学名誉教授。大阪大学大学院文学研究科博士課程仏文学専攻修了、パリ・ソルボンヌ大学第Ⅲ期文学博士、パリ第8大学文学博士、大阪大学博士(文学)。

著書に *La théâtralité dans les deux « Education sentimentale »* (France Toshio, 1985)、『かきつばた 土田麦遷の愛と芸術』(大阪大学出版会、2003年)、訳書に『ギュスターヴ・フロベール 心の城』(大阪大学出版会、2015年)など。

柏木 隆雄 (かしわぎ・たかお)

編者紹介参照。

稲賀 繁美 (いなが・しげみ)

1957年生。パリ第7大学博士課程修了(文学博士)。国際日本文化研究センターおよび総合研究大学院大学教授(並任)。

『絵画の黄昏』(名古屋大学出版会、1997年)、『絵画の臨界』(名古屋大学出版会、2014年)、『接触造形論』(名古屋大学出版会、2016年)。

Emmanuel SCHWARTZ (エマニュエル・シュヴァルツ)

1952年生。古典文学教員資格取得。パリ国立高等美術学校主任学芸員。文学と美術との関係に関する論文多数。著書に『アカデミーから美術学校へ 歴史的、文学

的アンソロジー』(2001年),『パリ国立高等美術学校の彫刻作品集』(2002年),『マルゴ王妃からシャルリュス男爵までのマラケ河岸』(2008年). またフランス, 合衆国での各種展覧会の企画, 構成を行っている.『神々と人間. ホーマーの遺産』(2004-2005年, パリ, プリンストン, ニューヨーク),『自由派、パリで芸術家たること、1648-1817』(2014年) など.

Régis MICHEL (レジス・ミシエル)

スイス・イタリア大学招聘教授, 元ルーヴル美術館主席学芸員. 主要著書に次のものがある. *Posséder et détruire: stratégies sexuelles dans l'art d'Occident* (Réunion des musées nationaux, 2000), *La peinture comme crime ou "la part maudite" de la modernité* (Réunion des musées nationaux, 2001), *L'œil-écran ou la nouvelle image. 100 vidéos pour repenser le monde* (Casino Luxembourg, 2007).

井澤 幸三 (いざわ・こうぞう)

1956年生. 京都市立芸術大学美術専攻科西洋画専攻. 大手前大学メディア・芸術学部教授.

1977年～現在: 独立展出品(1995年～独立美術協会会員). 1984, 85, 86, 87, 88: 日本青年画家展出品(1988年優秀賞). 1985, 88, 93, 95: 安井賞展出品.

いまふくふみよ

1963年生. 京都市立芸術大学大学院芸術学修士染織専攻. 大手前大学メディア・芸術学部教授.

久木 一直 (ひさき・かずなお)

1952年生. 大手前大学教授 (メディア・芸術学部).

『笑いと文化』(共著, 大手前大学, 2006年),『現代社会を生きるキーワード』(共著, 大阪公立大学共同出版会, 2012年), 彫刻作品『南南西の風、風力3、晴れ。』(京展賞, 1994年, 等身大人体像, 素材はFRP).

山田 信義 (やまだ・のぶよし)

1947年生. 京都市立芸術大学・西洋画科卒業. 大手前大学・メディア・芸術学部教授.

東京・京都・大阪で個展38回開催, 企画・グループ展など出品多数.

Marie-Catherine SAHUT (マリ＝カトリーヌ・サユット)

パリ第四大学(ソルボンヌ)美術史専攻修了, 1976年からルーヴル美術館学芸員. 在ローマ, フランス・アカデミー研究員(1979-1980), ルーヴル美術館主任学芸員(18世紀フランス絵画, 古代部門コレクション担当)を経て現在同館名誉首席学芸員.

主要な編著: *Diderot & l'Art de Boucher à David, Les Salons: 1759-1781, catalogue de l'exposition*, Paris, Hôtel de la Monnaie, 1984-1985, Paris, Editions de la Réu-

nion des musées nationaux, 1984, « Watteau et la fête galante, Etudes techniques sur la peinture française de la première moitié du XVIII^e siècle », *Technè*, 2009–2010, *Antoine Watteau et l'art de l'estampe*, catalogue de l'exposition, Paris, Musée du Louvre, 2010.

翻訳者紹介

小林 宣之（こばやし・のぶゆき）

編者紹介参照.

田辺めぐみ（たなべ・めぐみ）

1970年生. パリ第10大学美術史学博士. 帝塚山学院大学非常勤講師.

「子宝祈願の遺産——ブルターニュ公継承問題をめぐって——」（『ステラ』第33号）, « La fonction signifiante de l'ornement marginal dans les livres d'Heures bretons du XV^e siècle », in *Histoires des Breagnes 5. En Marge* (Centre de Recherche Bretonne et Celtique, 2015), « Les sources d'ornement végétal dans les Heures de Marguerite d'Orléans », in *Traces du végétal* (Presses Universitaires de Rennes, 2015).

中 村 翠（なかむら・みどり）

1978年生. パリ第3大学ソルボンヌ・ヌーヴェル博士（文学）. 京都市立芸術大学講師.

「ゾラと科学技術——『労働』（1901）を中心に」真野倫平編著『近代科学と芸術創造——19～20世紀のヨーロッパにおける科学と文学の関係』行路社, 2015年, 425～444頁. « L'Assommoir et Mon voisin Jacques d'Émile Zola : étude comparée de la genèse des personnages secondaires » in *Genesis*, No. 39, 2014, pp. 181–198. « L'« annonce » zolienne : le roman et le cinéma » in *Re-Reading Zola and Worldwide Naturalism : Miscellanies in Honour of Anna Gural-Migdal*, Cambridge Scholars Publishing, 2013, pp. 80–93.

仏語監訳者紹介

Éric AVOCAT（エリック・アヴォカ）

1972年生. パリ第8大学博士（フランス文学）. 大阪大学特任准教授.

Le Japon vu par Hokusai, Album de l'exposition, Paris, Éditions de la Réunion des musées nationaux - Grand Palais, 2014, 48 p., “Le discours le plus tragique et le plus pur : une ébauche de l'hamartia révolutionnaire”, in *Orages - Littérature et culture 1760–1830*, n°14, *Le tragique moderne*, préparé par Maurizio Melai, mars 2015, p. 59–71., “Neuf acteurs en quête d'histoire : les jeux du théâtre et de la Révolution dans Notre terreur”, in *Comment la fiction fait histoire - Emprunts, échanges, entrecroisements*, textes réunis par Noriko Taguchi, Paris, Honoré Champion, 2015, p. 311–326.